

教育委員会会議録

令和5年（2023年）9月定例教育委員会会議

開 会 日	令和5年（2023年）9月28日（木）	
開 会 時 間	午後2時00分 ～ 4時20分	
開 会 場 所	SPRING熊本花畑町 7階 D会議室 ※一部オンライン開催 オンラインでの出席者については各執務室	
出 席 者	委 員 会	遠藤洋路 教育長 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苦野一徳 委員 澤栄美 委員 村田慎 委員
	事 務 局	田口清行 教育次長 小島雅博 教育次長 中村順浩 総括審議員兼教育総務 部長 須佐美徹 学校教育部長 他
提 出 議 案	議第71号 熊本市教育委員会公印規則の一部改正について	
報 告	(1) 第1回広聴事業「部活動について」 (2) 熊本魅力推進生徒会による政策提言について	
自 由 討 議	(1) 高等学校・専門学校改革について	
署 名	西山忠男	
	澤 栄 美	
会議録作成者	教育政策課 玉野あゆみ	

令和5年(2023年)9月 教育委員会会議録【9月28日(木)】

〔開会の宣告〕 遠藤洋路 教育長 〔会議の成立〕 遠藤洋路 教育長	令和5年9月定例教育委員会会議を開会いたします。 本日は、私の他5人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。 会議録署名人は、西山委員と澤委員とします。
日程第1 前回会議録等承認 遠藤洋路 教育長	それでは、会議日程の日程第1 前回会議録承認の件に入ります。 8月24日開催の令和5年8月定例教育委員会会議録、9月14日開催の令和5年第9回臨時教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録を承認することに、ご異議はありませんか。 (異議なしの声) 異議なしと認め、前回会議録等を承認することに決定します。
日程第2 事務局報告の件 (1) 事業・行事等報告について ○ 前回定例会議(R5.8.24)以降の事業・行事報告 ○ 今後の予定 ○ 職務代理者の報告	「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」第13条第2項では、教育長に事故があるとき、または、教育長が欠けたときは、あらかじめ、その指名する委員がその職務を行うと定めており、教育長に事故がある場合などに事務に支障を来すことがないように、あらかじめ委員の中から職務代理者を指名することとしています。 この規定に基づき、小屋松委員を第一職務代理者に、西山委員を第二職務代理者として指名しましたので、報告します。
日程第3 議事	・議第71号 熊本市教育委員会公印規則の一部改正について

《中川浩二 教育政策課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

日程第4 報告

報告（1）第1回広聴事業「部活動について」

《中川浩二 教育政策課長 報告》

西山忠男 委員

この会の後、いろいろ考えていたんですけど、希望する先生だけ部活動の顧問を担当するというやり方もあり得ると思っていたんですが、そうすると部活動の数を絞らなくてはいけなくなりますよね。例えばバレー部と水泳部とあったとしたら、水泳部の顧問の先生をやってもいいと言うから水泳部を残したというかたちになるかもしれませんが、そうすると、二、三年後にその先生が転勤して別の先生が来て、自分は水泳の指導はできないという人ばかりになったらもう続かなくなるわけで、そういう難しい技術的な問題があるなというふうに感じたところです。

ですから、この課題は難しくて、やっぱりある部を存続させると決めたらそれはある程度存続させるように努力しないと学校の責任ということもありますので、その辺をどう考えたらいいのかなというのが、今悩んでいるところです。

遠藤洋路 教育長

今、部活動改革の検討委員会の中で議論をしているところでは、例えば必ずしも勤務校の部活の指導をすることには限らずに、例えば自分の家の近くの学校であるとか、自分のやりたい、指導したい部活の部がある学校であるとか、ある程度中長期的に一つの学校で他の学校に異動したとしても同じ学校の部活の指導ができるような、そういう仕組みにしたかどうかという議論は反映されているところです。ただ、今の部活動の数と今の指導できる人の数を比べると、現状ではやっぱり指導者のほうが少ないんでしょうから、ある程度合同で部活動をやるとか、部活動の数を絞っていくということはいずれにしても必要になって

西山忠男 委員	くるのではないかというふうには考えています。 今、教育長が言われた合同でという話も幾つか話題になったんですけど、合同でやるときの難しさは、やはり生徒が移動しなきゃいけないという問題が1つと、もう一つはある先生から、他の学校の生徒の面倒まで見られるかみたいな意見も出たんですね。そういう激しいかたちでは言われなかったけど、それに似たようなニュアンスのことを言われて、そうですねと。負担軽減のためにやるのに合同で負担を増やされたらたまらないだろうなというふうにも思ったんですね。ですから、合同もなかなか難しい問題があるなと思いました。
遠藤洋路 教育長	場所、学校の立地というか学校間の距離にもよるので、必ずしも全部の学校で、合同で全部の部活ができるということではやっぱりないと思いますので、それはある程度選んでいく。合同でできるところは合同でということなんでしょう。 部活動の検討委員会の状況というのをもし事務局から報告というか、今教えてもらえれば。
松永直樹 教育改革推進課長	部活動改革検討委員会につきましては、昨年度来開催を重ねておりまして、現在、改革の基本方針というものを提出しております。 子どもたちのスポーツ文化芸術活動の充実を図る。学校部活動の教育的意義や役割を保持する、学校部活動を残していくという方向性。さらに、教職員や地域人材で指導を希望する者が指導をする。教員や地域人材で指導を行う場合には、教員含めて適正な対価を支払う。この4つの基本方針の下、議論しております。 西山委員がおっしゃっておられますように、そのやり方の一つとしまして、合同部活動というものが出ております。現在42校ある中で各校ペアリングを組んでやるというような方向性を考えておりますが、これもおっしゃられましたとおり、様々な課題があるかと思っております。 ただ一方で、現に合同部活動を実施しておりまして、良好な関係の下、子どもたちも先生方も充実した活動をしているというようなところもございますので、そういった学校をモデルといたしまして、さらに合同部活動の在り方を検討していく中でどういった課題があるのか、どういった後押しがあると進めや

	すいのかというのを整理しまして、一つの方策として合同部活動というのをやってまいりたいと思っています。 さらに、それだけだと、言ってしまえば数を減らしていくというようなことだけになってまいりますので、今ある学校にない部活動でも実際に体験できるでありますとか、人材バンクをきちんと充実させたかたちで設けることにより、退職教員を含めた様々な方にご協力いただいて、できる限り指導者の確保を行う中で先生方の負担軽減を図りたいと思っております。 今回は10月11日に予定をしまして、その中では中間報告といたしまして、最終報告に至る論点整理というのをさせていただき予定としております。
遠藤洋路 教育長	中間報告が出たら、教育委員会会議でもぜひ報告してもらいたいと思います。
苦野一徳 委員	実現可能性を度外視してのアイデアなんですけど、試合とかもありますのでなかなか難しいとは思いますが、海外を見ると、シーズンごとにどのスポーツをやるかが違ったりしますよね。これを行っている市立の中学とかも結構あったりするんですね。それが結構よくて、1年のうちのこの時期はバスケットをやろうとか、今は水泳をやろうとか。もし、ローテーションをうまく組めれば、先生もその時期だけやればいいのかもしいです。 というのは、子どもたちがいろんなスポーツや文化活動を体験できるという意味では、より部活動の意義も深まるのかなという思いがあります。うまくパズルをやれば、今水泳やりたいけど、ここにはないんだったら、あつちは今その水泳をやっているからみたいなことももしかしたら可能になってくるかもしれないし、うまく組めれば先生の数と子どもたちの希望とがうまくマッチングできるようなやり方ってできるのかなということちょっと考えてみました。
松永直樹 教育改革推進課長	部活動改革検討委員会の議論の中では、今、苦野委員がおっしゃられていましたような部活動の在り方についても言及がなされておりまして、そういった新しい在り方についても今後研究してまいりたいと考えているところです。
遠藤洋路 教育長	今のやり方を前提に考えるとどうしても選択肢が限られてし

西山忠男 委員	まいりますから、今、苫野委員がおっしゃったように、少し違う枠組で考えてみるというのも有益かなというふうには思いますね。 今の苫野委員のアイデアはすごく面白いと思うし、確かにアメリカあたりではそういうふうに行っている。ですけど、日本の文化がそうはなっていないんですよね。何か要するに勝利至上主義で、例えば中体連で勝つことが目標というようなことになってくると、やっぱり一年中同じスポーツやらなきゃいけないというふうになってしまうから、その文化そのものを変えない限りなかなか難しいのかなと思うんですよね。その辺はどうなのでしょうね。
澤栄美 委員	今のに関連するんですけど、中学校の部活というとやっぱり中体連との兼ね合いがすごくあります。季節ごとにやると中体連も1年間で分けてやるみたいなことになって、中体連はかなり大きな行事でやられていますので、その中体連との兼ね合いも考えるべきかなというふうに思いながら聞きました。 それから1つ、質問もよろしいですか。
遠藤洋路 教育長	はい、どうぞ。
澤栄美 委員	対価について考えるというのが柱の中の一つにありましたけど、今、皆さん非常に安い部活動手当で、本当にスズメの涙程度のお金しか頂いていない状況だと思います。その辺は具体的には出ていないかもしれませんが、かなり金額的に上げるとかそういった話になっているかどうかということを伺いたいと思いました。
松永直樹 教育改革推進課長	委員ご指摘のとおり、部活動の指導につきまして、今、外部コーチ等については、本当にボランティアのようなかたちで実施をしております。また、教員については、土日は手当がございいますが、平日は全くないというような状況の中、実施をしております。 さらに、部活動指導員については、時給1,600円程度お支払いはしておりますが、それが適正な額かという点、またこれも課題があるかというふうに思っております。 最低賃金も上がっていく中で、こういった単価の設定をする

遠藤洋路 教育長

かというのはこれからの課題でございますし、予算の絡む問題でもございます。受益者負担という部分で保護者に負担を求めるのかといった課題整理も必要となっておりまして、指導料を払うという方向性はもうはっきり打ち出されている状況でございますので、そこはしっかり踏まえた上で、額の設定等について今後議論していく予定としています。

さっき西山委員がおっしゃったところも、種目によって違うというか、例えば今でも駅伝も大体やっていますが、別に一年中駅伝をやっているわけではないし、水泳とかも一年中やっている人もいますでしょうけど一年中やっていない場合もあるし、種目によってもしかしたらシーズンスポーツ的なものはできるのかなというふうには思います。それを今、ずっと一年中やっているものでも、例えば夏は水泳で冬はまた別のとか、そういうふうにしていけばある程度はできるのかなとは思いますが、それはちょっと実際やってみないとどのぐらい指導者がいるかも分かりませんので、アイデアとしてはあっていいのかなと思います。

対価のほうも今、課長から説明がありましたけど、ある程度具体的になればなるほど、じゃ、誰がどうやって負担するのという話で、実際どのぐらいお金が確保できるのか。それから、どれぐらい人が確保できるのかによってどういう選択肢があるのかというのはやっぱり変わってくるので、そこもこれから、その中間報告の後には具体的な作業で何をどのぐらいできるのかというのを探っていく、そういう段階に入っていくのかなというふうには思いますけど。今のところまだ、先ほど課長から紹介があったように、基本的な方針を決めるという段階ですね。そこから、じゃ、その方針をどのぐらい具体化できるかということを10月以降考えていきたいと、そんな段階かなと思っています。

苦野一徳 委員

先ほど私が申し上げたのは、本当に中体連の問題とかがありますので、やっぱり実現可能性は非常に難しいところはあると思うんですけど、こうやってもう一度最初から部活動の在り方について考えていこうというせっかくの機会なので、やっぱり常に根本から考えていく。何のための部活動なのかというところから、従来の文化、慣習ありきではなくて、もう一度何のためかというところから考えていくのも大事なかなと思っています。

遠藤洋路 教育長

ます。やっぱりスポーツや文化に子どもたちが親しんで、生涯学習、生涯スポーツであったり、生涯の文化活動の礎を築くというようなことがむしろ目的であるというようなかたちで合意されたら、そのためにどういうふうな部活動の在り方がよいだろうかというふうに多分考える。

そのときに、今までのいろんな効果というか、そういったことの検証も必要だと思うんですね。私は専門ではないのですが、日体大のある先生から聞いたことなんですけど、日本のスポーツは学生まで、中高大ぐらいまでは結構世界的に強いらしいんですが、プロのスポーツになったりそれ以降になるとがくんと弱くなる。なぜかという、ずっと指導されたとおりにばかりやってきて、スポーツを楽しむとか他のスポーツを知らない。そればかりやっていて、楽しみ方とか自分で考えてやるとか、こういったことが突然なくなって、本当に自分の頭で考えなきゃいけないプロの世界だったり社会人の世界になってくると途端に世界に通用しなくなるんだっていう話を日体大の先生から聞いたことがあったんですね。

特に部活動なので、別にそういったプロの選手を育てることが目的ではありませんけど、やっぱり自分たちでスポーツを楽しむとか、それも一度このスポーツをやったらもうそれ以外できないとかじゃなくて、やっぱりいろんなスポーツを楽しめて自分に向いているものを見つけたりとか、運動することの楽しさを実感できたりとか、何かそっちのほうにもうちょっと。さっき西山委員がおっしゃった勝利至上主義的なところじゃなくて、もうちょっと生涯スポーツの観点から運動に慣れ親しむとか、文化活動に慣れ親しむというところを大事にするということに、例えばですけど、熊本市はもしかしたら大事にしたいねというようなコンセンサスがもし出てきたら、そっちの方向でもう一度最初から考え直すというのもあってもいいのかもしれないなということを、本当に実現可能性は度外視ですけど思ったところです。

今の小学校は総合運動部ということで、まさに苦野委員がおっしゃったように季節ごとに違うスポーツをやってみたり、ある程度有力というか、楽しもうという、そういうふうな運動部に今移行しているんですね。

だから、中学校もそういういろんなものを楽しみたいという人のための部活動、総合運動部的なものがあってもいいし、一

	つのものを極めたいという人向けのある程度競技志向のものがあってもいいし、幾つか種類があってもいいのかもしれない。 ただ、競技志向で本当にプロを目指すみたいな人は、部活じゃないところに行くのかもしれませんが、いろんなタイプがあってもいいんだろうなというふうには思いますね。水泳なんかも、スイミングスクールとかは、そういう選手コースとそうじゃないコースみたいなのが分かれていたりしますので、その辺はもしかしたら西山委員がおっしゃったような勝利を目指してやるタイプとちょっとずつ楽しもうみたいなタイプと。 実際、アンケートでも両方あるんですよね。子どものアンケートでも保護者のアンケートでもそうなんですけど、「専門的な指導を受けたい」という答えと、それから「もうちょっと緩くやりたい」という答えとそれぞれあるので、それぞれに合ったものが用意できるのが一番いい方法だと。そんなに人がいるのかという問題を置いていても、それは方向性として一つにならなくてもいいのかなというふうには思いますね。いろいろあり得るんだろうなと思います。
小屋松徹彦 委員	子どもたちの運動する機会を確保する人材をどうやって確保するかと、これも非常に大きな問題だと思うんですけど、現実、私が知っている地域がどういうふうな状況になっているかというと、もう支えている人間が本当二、三人で数年やっている状況です。その後、じゃ、誰か担ってくれる人間がいるのかというと、これがなかなか見つからないということで、結果的には最初にやった人たちがずっとやらざるを得ない状況が続いているということなので、意外と地域にも人材はいないんだなと思います。ただ、支える人材をある程度集めないといけませんけど、地域に頼り過ぎるとこれまた痛い目に遭うなというのが、ちょっと見えてきたなというふうに思いました。 それと、もう一点、熊本県は部活動があるという、逆に言うと珍しい県だなというふうに言われているんですよね。じゃ、部活動のない県はどういうふうなことをやってきたのかということ、情報収集されているのであればどうかたちでされているのか、そこら辺をちょっと聞いてみたいなと思います。
遠藤洋路 教育長	小学校で部活動があるのは珍しいでしょうけど、中学校は大体全国的に部活動があるのが現状だというふうには思います。小学校はほとんどないところのほうが多いですね。熊本県もも

松永直樹 教育改革推進課長	う大分というかほとんどなくなって、今地域に移行していますので。そういう意味では、かなり全国と熊本県で違いは少なくなってきたのかなというふうには思います。 既に部活動、中学校も地域に移行しているところとかないうところというのは、今あるのはどんな感じなんですかね。何かご存じですか。 現在、国が令和5年度から進めている地域移行の動きの中では、全国的には土日の部活動を地域移行とする動き、これは進んではいるんですけど、全体として地域移行しているところは非常に少ない状況です。 ただ、全くないわけではございませんで、地域の皆さんがNPOのような、会費を払うというようなかたちで生涯スポーツの一環として学校部活動を位置づけて、地域全体で子どもたちを支えていくというようなやり方を取ってやる自治体もございます。 また、先ほど出ました小学校の例でいきますと、熊本県や一部の県以外にはありませんので、基本的には保護者がコーチになるような、少年団のようなかたちで指導をする。あとは民間のクラブチームができていてどちらかに入ると、そういったものが多く見られるような状況でございます。
遠藤洋路 教育長	地域に人材がないというのは、これは何か要請することはできないんですか。例えば熊大で地域の部活動指導者、部活動とかスポーツ指導者を育てるとか、千原台高校で地域の指導者を養成するとか。毎年100人ずつぐらい養成してくれたら、何年かすれば十分人材はできるんじゃないかと思うんですけどね。どうですかね。
苦野一徳 委員	それはありな気がしてきました。そういった情報交換の場を持ってみるのはありなのかなと思いましたし、あと、学生をもうちょっと活用することはできるのかなという気もしますね。部活やサークル活動でやっている、そういった学生たちに何かしらのかたちで関わってもらおうというのがもし可能なのであれば、可能性はあるのかなという気がしました。
遠藤洋路 教育長	今そんなに十分いないということはよく分かっているので、それをじゃ、どうしたらいいかということで、育てるしかない

	んじゃないかなと思います。
小屋松徹彦 委員	関連でいいですか。
遠藤洋路 教育長	はい、どうぞ、小屋松委員。
小屋松徹彦 委員	さっき私はなかなか次の、要するに担当してくれる保護者がいないという問題を言いましたけど、やっている人間が次の人間を探すという、狭いところでやっているような気がするわけですね、その継続を。そうではなくて、今のご意見にありましたように、もうそういう人材を養成するよということをどんと公募して、そして集めて、そしてやりませんかというような、何かそれぐらい思い切って教育委員会主導でやってもいいかなというふうにちょっと思いました。
遠藤洋路 教育長	部活動改革検討委員会のほうでも、ぜひその辺、人材を確保する方策をこれからも考えられると思うので、検討していただければと。
西山忠男 委員	今の件ですけど、熊本大学の教育学部には、実は生涯スポーツ課程という、そういう地域のスポーツ指導者を育てるというコースがあったんです。でも潰されたんです。これはいわゆるゼロ年課程といって、教職にならない、免許を取らない課程で、非常に教育学部の中で立ち位置が悪くて、全国的に教育学部を縮小するプロセスの中でなくなっていったということがありますので、大学にはもう期待できないと思います。
遠藤洋路 教育長	ただ、これから全国的にも部活動の地域移行とか、教員以外の人の指導のニーズがますます高くなるでしょうから、これまではあんまり目が向けられていなかったのでしょうけど、逆にこれからはもっとニーズがあるので大学のほうでもという、それはあり得るのかなと思いますし、文科省にも何かのときに言ってみましょうかね。そんな、人がいないと地域移行は無理ですよって、大学でもっとそういう人材育成も含めて考えたらどうですかというのは、何か話をする機会があればぜひ言ってみようかなと思いますね。今までできていなかった部分とか、減っていった部分、もしかしたらこれからむしろ改めて必要になってくるなら逆転可能かもしれませんね。

西山忠男 委員	今まで負担感の問題から運動部の部活動を念頭に議論してきたと思うんですけど、文化部の部活動についてちょっと議論したいんですが、文化部では熊本は中学の合唱部が活躍したのは有名ですし、高校では必由館がいろんな部活で活躍していますが、そういう文化部の部活動を担当している先生方はどう思っておられるのか。 必由館の城野校長、ちょっとご存じだったらお答えいただけますか。
城野実 必由館高等学校校長	実際に顧問を持たれている方々は経験者の方々と胸っているという部分があるので、継続してやりたいという思いはすごく強いです。 実際に、うちだと吹奏楽部も合唱部も金賞を取って、和太鼓部も全国で賞を取ったり、昨年も合唱部が全国で賞を取ったりしているんです。それに関しては、やっぱりそのタイミングでやりたいと思っている先生たちがおられる間は全てうまくいっているんですけど、やっぱり負担感とされている先生たちが第2、第3の顧問として全国大会に行くのに、誰かが生徒の引率のために一緒に行くことが必要というときには、今文化部を持たれているとか、週1回の部活動の顧問の先生たちにローテーションでそこについて行ってもらおうとかいうことで学校内では対応しているような状況です。
西山忠男 委員	中学の部活動の状況についてご存じの方はどなたかいらっしゃいますか。
宗裕紀 東野中学校校長	文化部も運動部と同じような状態です。やはり負担感はある。私が知っている限りは、そういう先生方は多いです。
遠藤洋路 教育長	そこはじゃ、あんまり運動部と文化部では変わらないということですかね。
西山忠男 委員	文化部の場合は、先生が毎日付き合わなくても、自由に絵を描かせるとか、自由に書道の練習をさせるとかということができるので負担感は小さいんじゃないかなという気もしたんですけど、そういうことはないんでしょうか。

澤栄美 委員	中学校に何年かおりましたが、文化部でも吹奏楽部とか合唱部で活躍しているところは、もうスポーツ部と変わらないぐらいの毎日の練習量だし、例えば茶道部とか美術部は、子どもたちが活動を始めて先生も後からちょこっと来るというような、部活の内容によって差があると思います。
上野正直 教育改革推進課教育審議員	文化部活動のほうに携わった経験がございますが、現状、中学校の音楽の先生方というのは、やっぱり音楽の部活動を持っている先生方が多いんですけど、一方で、ご自分でもいろいろな団体に入って活動されている先生方が多いです。 それともう一つ、文化というものは、どちらかという世代を超えて共に共有できるような空間とか時間を持てるような部分も多くありますので、指導者という面でいえば、1つはないものねだりじゃなくてあるものねだりで探せば、これから掘り起こしは非常に可能ではあるのかなと思っています。 先生方に聞いてみると負担感と出てきますけど、社会全体で聞いてみると、これからの社会貢献、人とのつながりとかを考えれば、ぜひとも貢献したいというような方々は多くいらっしゃるのではないかなと見ています。また、そのような声も上がってきております。 もう一つは、昨年度ぐらいからウェルビーイング元年と言われていますけど、いろいろと文化活動は見直されてきていますので、特に子どもの成長に資するようなところでは、社会全体で取り組んでいけるところでは文化のほうは少し可能性があるのかなと見ています。
遠藤洋路 教育長	分かりました。 部活の種類という意味でも確かに、指導者がもし豊富にいるならそういう分野の部活動を充実していったって、生徒もそっこのほうを増やしていくという方向性もあるかもしれませんね。 村田委員はいかがですか。今、話を聞かれて。
村田槇 委員	素人としての意見ですけど、3ページの西山先生のご意見を読んでいて、やりたい人がやって、それ以外では外部のコーチなどをお願いするというような柔軟なやり方というのが、継続していくためには必要だというふうに自分も感じてはいるんですね。 子どもが何の部活をやるか、それ以前に活動するかしないか

遠藤洋路 教育長	というのを選ぶ自由があるように、先生方にももちろん部活を持つ持たないの自由があっていいんじゃないかというふうには思うんですけど、そうなったときに、顧問をしない選択をした先生たちが後ろめたい気持ちにならない環境であることがとても大事というか、大前提だと思うんですね。もちろん部活を受け持っている、受け持ちたい先生たちの強要とかそういうマイナスな意味で申し上げているのではなくて、希望しない先生たちが自分たちもやっぱり手伝ったほうがいいのかとか、やるべきなんじゃないかとか、引け目とかどうしても心苦しくなる方もいらっしゃるんじゃないのかなと思うので。部活をやりたい先生とやりたくない先生のどちらの意見もちゃんと相互理解というか相互承認というか、そういう環境というか職場であることが大前提なんじゃないかなというふうに思いました。 やりたい人とやりたくない人、アンケートだとどのぐらいの比率だったんでしたっけね。
松永直樹 教育改革推進課長	中学校部活動におきましては、ぜひ今後やりたいという先生方は4割程度いらっしゃるような状況でした。ただ、このアンケートの聞き方もちょっと画一的な部分がございます、例えば週1回だったらやりたいとか、そういった柔軟な部活動運営を前提とした質問ではなく、今の部活動を前提とした質問だったということもございまして、実態については、改革の検討の中で改めて聞きたいというふうに思っているところでございます。
遠藤洋路 教育長	仮にやりたい人が4、そうじゃない人が6で、4対6だったら、そのぐらいの比率で実際にもできるようにすれば、お互いそんなにどっちがどっちということでもないと思いますので。今、匿名でアンケートを取って、本当にやりたいという人ができるので、やりたくないという人はやらなくていいという、それがうまく実現できるような仕組みにしていこうということなんだと思いますね。
村田槇 委員	ただの感想なんですけど、同じ3ページの真ん中ぐらいの制度についての部分で、練習には参加しないが試合には出してほしいという保護者の要望があるというのを見て、いや、これは勉強はしないけど先生100点くれますよねって言っているの

遠藤洋路 教育長

と同じようなもので、そういうことをやっぱり言う保護者もいるんだというのがちょっと悲しい限りです。学校が何でも聞いてくれる、何でもやってくれる場所という感覚でいる方たちはやっぱり多いと思うんですよね。部活の指導方針とか、後からも出てきますけど、試合に出る基準というのは、そういう方々のためにもはっきり示しておくことというのはとても必要だと思いました。

そういう意見もあるのはあるんでしょうけど、それは言論の自由ですから言っていていただいても構わないですけど、そのとおりやる、聞く必要はないので、そこはそういうご意見もあるということ。

ただ、おっしゃるように、この部活はこういう方針で試合に出す人を決めますよということはあらかじめ保護者に説明しておく必要があるんでしょうね。

澤栄美 委員

今、村田委員がおっしゃったように、学校に勤めていると、全員部活ですよと言われたときに、実際には主になる先生が中心になって、そうじゃない先生たちは何か申し訳ないなという気持ちがありながら過ごすというのが現状だと思うんですよね。それで私、さっき対価がどのくらいになるのかを尋ねたんです。部活動をする方はお金ももらってされているので、自分たちはしないからもらわないという、その部分でのお互いの納得みたいなのがお金の部分でもやっぱり出てくるかなというのが1つあるんですね。

3ページの一番最後の行からの部分に、教育長がこういう状況でやりますというのを納得した上で入るといふうにしたかどうかという意見を述べられたんですけど、私がこの間の広聴事業のときに一番心に残っているのは、ある推進派じゃないほうの先生が言われた部活動の指針が出たときに非常に楽になったということです。それが熊本市の方向性なんだというふうに保護者も分かっている。今、中学校は5日しかやらない、通常の日は2時間で休みの日には3時間というような規定がありますよね。そういったことがもう決まっているので、もうそれ以上の要望は、保護者も言えないんだと。さっきみたいな、ちょっと普通あんまり言わないようなことを言われる方もいらっしゃるんですけど、だけど、そういう決まりがあると、すごい自分も楽なんだっておっしゃったんですね。

	それで、4ページの一番最後のところの私の意見なんですけど、教員は3日が上限でしか部活に出ませんよとかそういうふうに、これから部活動検討委員会のほうで具体的なところは決めていかれるので、要望にはなりますけど、そういった先生たちが楽になるような中身を、意見をせっかくいただいたので、その意見を入れて保護者に提示できるように、そして、その枠の中で自分たちはやっていますよというふうに堂々と答えられるようなものを提示していただくといいかなと思いました。
遠藤洋路 教育長	この意見交換の結果は部活動改革検討委員会のほうにも出すということなんですよ。
松永直樹 教育改革推進課長	まずはこの広聴事業の内容、さらに今回ご審議いただいた内容につきましては、11日の部活動改革検討委員会で共有させていただく予定としております。
遠藤洋路 教育長	ぜひ反映させていただければ。
西山忠男 委員	今の澤委員のご意見なんですけど、私はこれ、非常に気になっているのは、先生が参加しないでもいいという日に生徒だけで部活動をする。そのときに事故が起こったら誰の責任になるのかというのは、非常に気になるんですよ。それはどうなのでしょう。
澤栄美 委員	ちょっと私の説明の仕方が悪かったと思います。大体2人とか3人で部活動を持っていますよね。だから、A先生は3日、月水金やったので火木は他の先生がするとか、担当する日数が少なればいろいろ家事のこととか育児のこととか随分楽になれる先生もおられるので、複数で組むという、その前提での話です。
西山忠男 委員	分かりました。
遠藤洋路 教育長	ワークシェアリングみたいな感じですね。人数が足りればですね。そこはやっぱり一番大事なところだと思いますので。少しずつ分担してできる。逆に、少ない日数だったら指導したいという人もいるかもしれませんもんね。さっき課長からもありましたが、その辺はいろんな条件で指導ができるようにして

いく、柔軟にしていく必要があるんだろうなと思いますね。
他にご意見、ご質問はありますか。
ご発言がなければ、本件は以上といたします。

報告(2)熊本魅力推進生徒会による政策提言について

《松永直樹 教育改革推進課長 報告》

西山忠男 委員

非常にすばらしい取組だと思いましたが、1つちょっと気になったのは、高校生からの提案の3ページ目、魅力ある熊本市にするための提案のところで、若者が熊本でも、国際的にも活躍できるようにの最後に、塾代一部負担というのがあるんですけど、これがどういう趣旨なのかなというのがちょっと気になるんですね。塾の存在というのは教育委員会から見たら自己否定につながるような、目の敵みたいなものなんですけど、高校生から見たら塾というのはどういうふうに捉えてこういう発想になるのかなというのが非常に興味深かったんです。いかがでしょうか。

松永直樹 教育改革推進
課長

まず、私のほうから全体としてのお話をさせていただきたいと思いますが、この提言を取りまとめるに当たりましては、ほぼ学校の先生も我々も関わらずといいますか、子どもたちが自ら考えて資料等も作っているような状況です。その中で子どもたちがどのような思いでというところはちょっと十分に把握できていないところもありますが、発想といたしましては、やっぱり経済的な家庭環境、そういったものにとらわれず学びが充実できるようにといった思いはあったというふうに聞いております。全体としての状況は今のとおりでございます。

南弘一 千原台高等学校
校長

本校の生徒会の生徒もここに中心的に関わらせていただきました。この塾代の一部負担というところもありますけど、本校は、この5番目の各種検定の受験料を免除または補助というところをかなり主張しておりました。

今、課長からありましたように、各家庭の経済状況にかかわらずいろんな学びが深められるようにということで、彼らにとっては恐らく教育委員会がどうだとか関係なく、学ぶことにか

	かるお金が、進学を目指す子どもたちは塾代がかかるし、うちの生徒ですぐ社会に出ていきたい、検定をたくさん取りたいという子たちは検定代がかかるし、そういうところの補助をしてもらえらともっと学びやすくなるのにと。それでちょっと逡巡する仲間がいるというところに思いをはせての提案だったというふうに捉えております。
西山忠男 委員	分かりました。検定の受験料免除、補助というのはよく分かるんですけど、塾代一部負担というふうに言われたら、我々としては、塾に行かなくても済むような教育をしますとやっぱり言わなきゃいけないですね。それを実現していかなくちゃいけないと思うんですね。それは、私は非常に大きな課題だとも思っています。
遠藤洋路 教育長	教育委員会としても別に塾を否定しているわけではないし、自己否定とまでは思いませんけど。そこはもちろん塾に行かなくても十分勉強できる環境をつくるというのは我々の仕事ではありますけど、塾に行きたいという人に、いや、それはならんとか、そういう話でもないでしょうし。そこはそれぞれの立場があるのかなとは思います。
澤栄美 委員	資料を全部目を通して見たんですけど、お金が絡むような、お金をくださいという意見がとても多いなというふうにちょっと感じたんですね。後で学校改革のところでも出てくると思うんですけど、子どもたちが、例えば千原台なんかでもされていますけど、自分たちで何か作ったものを販売して、それでお金を頂いて、それを自分たちで活用していこうとか、そういう発想はちょっと欲しかったかなと思います。お金を補助してという意見がちょっと多いかなという感じはしたんですね。 もちろん大変経済的に苦労しているところとか、そういったところにはやっぱり厚く補助も要ると思うんです。やっぱり未熟な部分も確かにあるけど、これを考えたこと自体が彼らの成長にはつながるかなというふうには思います。 1つだけ、これはそうだなと思ったのが、もう50年近く前になりますけど、今の県立美術館の分館があったところに図書館があったんですね。そこに学習ルームというのがあって、以前はどの家にもクーラーがついているわけじゃないので、そこに集まって勉強したりしていたんですね。だから、そうい

	うところはある程度あっても熊本市が借り上げるとかいう意見もありましたけど、そういったところがあってまた子どもたちが交流できたり、そこでまた学びの場ができると、それはいいのかなと思って、いい意見だなとその部分は非常に賛成でした。
遠藤洋路 教育長	今、澤委員から自習スペースの話がありましたけど、教育委員会はまさにこれを提言されている側ですから、皆さんからも他にもこれはいいなと、1つぐらい何か来年度予算要求してみてもいいなと思う項目があればぜひ参考にさせていただきたいなと思いますが、いかがですか。
苫野一徳 委員	まずは、これを高校生が自分たちで企画したというのが本当にうれしいなというか、本当にすごいなと思って感動しました。自分たち高校生から、しかも市立高校だけでなく市内の高校に呼びかけるとい、これはすごいなと思って、本当に目指していきたい高校の姿だなと思って、もうとても感動しました。 幾つか、澤委員がおっしゃったようにそういう予算要求みたいなものもあるかもしれないんですけど、せっかく特に市立高校の場合は市立らしさを生かして市のリソースをいっぱい使ってというようなこともずっと議論されてきたことなので、お金だけでなくそういう今あるものの活用だったりとか、あと人の知恵ですよ。たくさんの頭脳が熊本市に存在しているので、そこをつないでむしろ何か一緒にやっていこうよという感じで、何か要求されたものに応えて、じゃ、予算つけてやるとか、そういう話より以上に一緒にやっていこう、共にまちづくりだったりの仲間になって一緒にやっていってくれませんかとかいうかたちでできたらいいなというのをすごく感じました。 それから、西山委員がおっしゃった塾のこともちょっと一言だけ。本当はそういった学校外の教育に頼らなくてもよいような公教育をしっかりとというのが大事だと思うんですけど、現実問題として、学校外の機会があるないで進学格差というものがある、ものすごくあるんですよ。 それを考えると、過渡的措置だと私は考えたいなと思っていますんですけど、例えばチャンス・フォー・チルドレンという団体があるんですけど、寄附等を募って塾に行きたくても行けない、予備校に行きたくても行けない生徒たちにクーポンを配るという、こういうようなこともされていて、これが実際に格差

	の是正につながっているというデータもあります。行政がそれを別に積極的にやるというわけではなく、そういったところと一定程度連携をしながら、学校外の教育格差というものが現状どうしても教育格差に結びついている以上、そこを是正していくような動きということはあっていいのかなという感じはしています。なので、この生徒たちが要求してきたものに対して、例えばそういったところと組んでやるなんていうことも可能性はあるんじゃないかなという感じでした。議論はしてもいいんじゃないかなという感じがします。
西山忠男 委員	これは非常に大きな問題なので、ここで議論しても仕方がないんですけど、やはり東大に合格する生徒の家庭の収入というのはかなり高収入だという調査報告もあって、家庭の経済状況が成績にかなり反映しているという現実がありますよね。おっしゃるとおりなんですけど、私は貧しくても塾に行かなくてもいい学校に行けると、勉強ができるようになれるという教育をするのがやっぱり公教育なんだという基本的な信念を持っていますので、そのところはもう少し日本全体としてちゃんと考えていかなきゃいけないんじゃないかなとは思っています。
城野実 必由館高等学校 校長	本当に生徒たちが他者理解ができたと思います。自転車通学生、バス通学生、いろんな子がいる中で今の困り感というのを素直に話をして、4つの部会に分けてそれぞれの部会の中で話をしたんですけど、これだけいろんな学校が来ている中で、それぞれ経済的に厳しかったり何だったりにということに同調しながらその人の発言をととても大切に聞き取って、今の子どもたちすごいなと思いました。一人一人が発言することに対して自分の中で腑に落ちるようにじっくり話し合いながら、またさらに自分の意見を言っていたというのがすごく魅力的に映りました。 その中で、熊本駅から水道町までのバスの直結便ができて、市役所に通われているとか水道町近辺に通われている人たちも直行便にかなり朝の時間帯流れているというのもあるので、やっぱりそういう交通事情の中で、回っていくと時間がかかるけど、うちで言えば必由館と済々黌とルーテルに行くような直行便をそれぞれのところから出してもらおうと、学生専用とかがあるといいだろうなという話を生徒たちがやっているもので、そういうアイデアはという話をしていたら、当日来られていた市役所の方々も、そういう意見というのは今まで聞いたことがな

遠藤洋路 教育長	かったので今後またそういう機会があれば話をしたいという意見もいただきましたので、今後の流れとしてそういう思いを伝えられればと思っています。 ですからこれ、せっかく高校生がここまで考えて提言したわけなので、もらった側もいや、すばらしいね、いや、ありがとうって言って何もしないというのは最悪ですから、やっぱり何かしないといけないと思うんですよね。やらないならやらないでちゃんとやらないという説明もする必要はあるでしょうし、やるならやるで実現できるようにしていく必要があると思いますので。毎年これをもらうだけでああそうですねというのでは、高校生にとって、結局言たって何も変わらないとか大人は何もしてくれないということの学習になってしまいますから、そうならないようにする必要がやっぱりあるでしょう。 となれば、今日もらってここで、いや、よかったですねで終わりではなくて、やっぱり何か実現するならするで私たちも動かないといけないんだと思います。 これは、教育改革推進課のほうとしては、この後どういう動きを考えているんですかね。
松永直樹 教育改革推進課長	今後の動きの前に、子どもたちの思いといたしましては、今回は市への提言ということでしたので、要求をメインにしたようなかたちに見えますが、実際はその後自分たちが行動することまでをセットで考えております。例えば要望の中でホームページの作成ということがございますが、場をつくってもらったらコンテンツは自分たちで考えていくというようなこと、こういう姿勢でおりますので、そこは関係各課にも伝わっております。 今後の展開なんですけど、まずは子どもたちとともに関係各課を回りまして、何が実現可能なのか、実際、もう既に一緒に組んでイベントをやりたいとか、場は設けられそうだとか、そういったご意見が出ておりますので、そこをまず詰めていきたい。 あと、実現が難しいものについては、こういった課題があるけどどう思うというようなことで投げ返しをしてまた考えてもらって、またさらに意見交換を進めていく、そういったことをやっていきたいと。 私たちとしては関係各課をつなぐ場づくりというのをまずしっかりやっていって、必要な予算要求があるのであれば来年度

遠藤洋路 教育長	の予算にしっかり反映をさせたいというふうに思っているところでございます。 現状は以上でございます。 やっぱり何かしようと思ったらお金がかかるというのはある意味当たり前のことなので、そこは必要なものは要求していくということでしょうし、お金をかけなくて済む方法を考えてということももちろんあるでしょうけど、それでもかかるものはかかるので、ぜひそこから逃げないで私たちも予算が要るものを実現できるようにしていきたいなと思います。
苦野一徳 委員	ちょっと情報提供までではあるんですけど、詳しい資料のほうの8ページに他校の校則について知りたいとか、こういった校則の見直し等についてのお話もあって、熊本市はそれをいち早く取り組んできた、本来先進市であると思うので、このところをととても大事にしたいなと私も思っています。 つい先日、これはまさに全国の校則見直しの活動をずっと続けてきたカタリバがみんなのルールメイキングプロジェクトというのを4年間やっているんですけど、先日、そのルールメイキング・サミット2023というのをやって、僕も毎年出ているんですけど、熊本市からも1人中学1年生が参加していて、私、帰りに同じ飛行機になって、保護者の気持ちで一緒にとっても楽しく、ずっと楽しく話しながら帰ってきたんですけど、でも熊本市は1人しか参加がなかったんです。その中学生1人だけだったんです。公立で、しかも今回は一応申込制。エントリーして選ばれれば100人前後に交通費、宿泊費が支給されるというとても恵まれた条件で全国から中高生が集まってきて、すごく熱く自分たちのルールメイキング、校則の見直し等について意見交換をして、すごくボルテージが上がっていくということがあって、こういったものも今ムーブメントになっているので、せっかくなら熊本市からももっと応募があるといいなと私思ひまして、高校でもぜひ広げていただけたらうれしいなと思いました。
遠藤洋路 教育長	その案内はどんなふうに来ているんですか。学校に来ているんですかね、やっぱり。
苦野一徳 委員	学校には行ったんですかね、行っていないんですかね。ネット

	上ですかね。
遠藤洋路 教育長	その子はじゃ、ネットで見つけて自分で応募したということですか。
苫野一徳 委員	そうですね。個人で応募していましたね。
遠藤洋路 教育長	そうすると、もっと熊本市からどんどん来てくれって言うためにはどうしたらいいんでしょうかね。
苫野一徳 委員	各学校に案内を。
遠藤洋路 教育長	カタリバから出してもらおう。
苫野一徳 委員	そうですね。
遠藤洋路 教育長	そうですね。じゃ、そこは今度、今村さんと一緒にする機会があるので、案内してくれと言っておきましょうか。
苫野一徳 委員	ぜひ。
遠藤洋路 教育長	分かりました。 本当、積極的に熊本市の子どももそれはぜひ参加してほしいですね、どんどん。
澤栄美 委員	何か実現可能ならということで、今ちょうど詳しいほうの資料を開けたときに、自転車専用レーンを造るとというのが、これもかなりお金が要ることではあるんですけど、今、朝課外がなくなって8時台にすごくバスも混むし電車も混むし、何かのときに朝から自転車で行こうかなという話をどなたかにしたら、もうとにかく高校生の自転車がいっぱい危険ですよと言われたことがあって、非常に危ない状況もあるかなと思ったときに、この辺がもし実現可能であれば少し考えてもらおうといいかなというふうに思いました。
遠藤洋路 教育長	高校生の自転車はやっぱり非常に市内で問題になっていて、議会でもしょっちゅう何とかしてくれという意見が出るんですよね。それで、自転車専用レーンを造るというのも一つですし、

その次にあるように、またバスで行けるようにするという方法も自転車を減らすというか、自転車の危険を減らすという有効な方法だろうなというふうに思いますよね。

本当、朝課外がなくなって、通勤時間と重なるので非常にバスも混んでいるし自転車も混んでいる。実感しますよね。以前はバスはがらがらで毎朝座れたのに最近座れないですもんね。やっぱり高校生が半分ぐらい乗っていますもんね。

朝の交通というのは、高校生の実感に基づいたこういう提言をもらったので、教育委員会だけじゃなくて市役所、先ほどもありましたけど、他の関係部局と議論をしていく必要があるなというふうに思っています。

さっきありましたけど、バスも必ず乗ってくれるお客さんがいるなら、恐らくそれは採算が合えば悪い話じゃない。今、運転士さんがいないという問題が大きくなるのかもしれませんが、それさえクリアできれば非常に有益な提言かなと思いました。

他にご意見、ご質問はありますか。

ご発言がなければ、本件は以上といたします。

日程第5 自由討議

自由討議（1）高等学校・専門学校改革について

《古家幸生 総合ビジネス専門学校校長 南弘一 千原台高等学校校長
城野実 必由館高等学校校長 説明》

遠藤洋路 教育長

では、今の3校からの発表も受けて、自由討議としたいと思います。

これはどなたの発案でしたっけ。西山委員ですかね。

じゃ、西山委員からまず一言お願いしてもいいですか。

西山忠男 委員

どの学校もすばらしい改革が進んでいる様子で、ありがとうございます。

もう議論に入ってもよろしいですね。

遠藤洋路 教育長

どうぞ。

西山忠男 委員	まず、ビジネス専門学校から議論したいと思うんですけど、非常にすばらしい取組をなされていると思いますが、残念ながらまだ生徒さんが十分集まっていない状況ですね。これを何とかしないといけないだろうと思うんですけど、ビジネス専門学校では同窓会組織というものはあるんですか。同窓会組織をもう少し活用して、千原台がやっているように寄附金を集めたりとか、何かもう少し広報を、いろいろ考えはあるんですけど、もう一度広報して従来のイメージを払拭して新たな人材を発掘していかないとなかなか生徒は集まらないんじゃないかなと思うんですね。思い切って熊日新聞に全面広告を出すとか、何かそれぐらい思い切ったことを考えてやらないといけないんじゃないかなと思うんですが、その辺はいかがでしょうか。
古家幸生 総合ビジネス専門学校校長	同窓会組織はございます。創立75周年になりますので、そこそこの同窓会の規模ではなかろうかと思っております。高校の同窓会のような密接な関係にはございません。 ただ、同窓会長さんは学校評議員に入っていていただき、同窓会の立場から学校側にいろんな助言はいただいているところです。その中で、2年ぐらい前、同窓会として広告をすべきではなかろうか、そういった話をいただいたことはありました。ただ、今のところまだ実現しておりません。そういった状況でございます。
西山忠男 委員	できれば、ぜひその話を進めていただいて、新生ビジネス専門学校を大きく打ち出して学生をしっかり集めていただければと思います。
小屋松徹彦 委員	今、まだ応募者が少ないということでしたけど、私は逆にものすごく増えやしないかなって非常に期待しているんですね。来年再来年となっていけば、恐らく応募者というのは数がどんどん増えるんじゃないかなという、非常に期待をしております。 それと、一番私が心配していたのは、外部の講師の方々がどれぐらいの数集まるかなと思っていましたけど、ここを見ると28名今いらっしゃるということで、やっぱりすごく努力をして教員集めをされているなということですね。私もちょっと安心したところです。 PRの仕方ですけど、私、たまたま昨日YouTubeを見ましたら、古家校長がお話をされているのが幾つか出ていました

遠藤洋路 教育長	ので、ああいうのが地道にずっとつながっていけば、恐らく来年再来年には本当に応募する生徒数がどんどん増えるんじゃないかなというふうに非常に期待感を持ちました。 それと、やっぱりこれは2年後、新しい卒業生が出たときに、その生徒たちがどのような活躍をするかというのがまた非常に楽しみで、受入れ企業は恐らく今までの受入れ企業とちょっと違ったところになる可能性も十分秘めているなという気がしていますので、卒業生がどういう進路を取ってどういう活躍をするか、非常に楽しみにしています。 感想ですけど、以上です。 外部の講師の方で、私も最近、「いや、実は今度ビジネス専門学校で非常勤で教えるんですよ」って何人かに言われたことがあって、たまたまそういう周りにいる人を誘っているのか分かりませんが、結構いろんな人を呼んでいるんだなというのを非常に思いましたね。だから、そこはとても面白い内容になるんじゃないかなと思っていますので、それがうまく伝われば、今、小屋松委員がおっしゃったように生徒募集もどんどん増えていくのかなというふうに思っています。それだけの内容がしっかりあるんじゃないかなというふうに思えるような取組状況かと思いますね。 他にご意見、ご発言ありますか。総合ビジネス専門学校以外のことでも構いませんけど。 必由館は、僕たちは探究より受験勉強がしたいんですって言っていた頃と隔世の感がありますね。ここまで来たんだなと思って感慨深いものがありますね。ここまで至るまで、どういうふうになってきたんですね。
城野実 必由館高等学校 校長	やっぱり生徒会長を中心に、自分たちで一緒に考えていこうという発言をしたのが後輩たちには伝わっていました。その中で、次の学年は、今度は教育委員さんたちと話をする中で、具体的なものを自分で発言したから本当に必死にならないといけないという思いも出てきていますし、先生方も、もう令和6年の4月からはスタートしないといけないので、じゃということで、昨年度この20校の「新時代に対応した高等学校改革推進事業」に応募した後、やっぱり月に1回ずつぐらい研修しているんですね。本当に今までの研修から比べれば数多くの研修だし、それも普通科改革が何で必要なのかというのを長田調査

遠藤洋路 教育長	官に話をしていただいたり、それを生徒にも先生にも話をしていただいたと。 そして、また今回、5月に市役所連携事業をするときにも副市長に話をしていただいて、19課来ていただいて、その中で生徒たちがやっぱり変わっているんだということを実感できているというのがこの流れになっていると思います。 先生たちももうしっかり、もうこれで4月にスタートするために、あと次は何だろうって、何が欲しいというのが7月の教育委員会会議で言ったような要望の流れで次のページにあるようなかたちになります。 ちょっと説明させてもらっていいですか。 はい、どうぞ。
《城野実 必由館高等学校校長 追加説明》	
西山忠男 委員	千原台も必由館も生徒が主体的に改革を考えて、自分たちでいろんなことをやっているというのは非常に素晴らしいと思いました。千原台は中学生の体験入学でいろんなことをやってくれていますし、必由館は動画も生徒が主体的に作っているような感じですね。 それぞれ1つ質問があるんですけど、まず、千原台には、学力保障・授業力向上のところで、私はビジネス専門学校と連携したら高度な授業が展開できるんじゃないかなと思っていたんですけど、その点についてどうかということをお伺いしたいですね。 必由館については、国際コースを、先ほどの高校生の主張にも留学の支援というのがありましたように、やはり留学希望というのは強いと思うので、国際コースにあった留学生制度を何とか成功させていただきたいと思っています。この点についてコメントいただきたいので、それぞれお願いします。
南弘一 千原台高等学校校長	ビジネス専門学校とはこれからもしっかり連携、提携をしていきたいと考えていますが、まず一番最初にできそうなことは、ビジネス専門学校の夜間の講座で日商簿記検定の講座を開かれます。そこに、毎年本校も日商検定を受けたいという生徒がお

古家幸生 総合ビジネス 専門学校校長	りまして、先ほどもありましたが、今まで民間の塾とかに行っている生徒もいましたので、そちらのほうを勧めていくということなどをしていきたいと思いますし、本年度はビジネス専門学校にぜひ行きたいという生徒が少しずつ増えてきているというような状況はございます。 南校長がおっしゃいましたように、今、5講座開講しております。日商簿記、画像処理、英会話、いろいろな科目を開講しており、社会人だけでなく、今は高校生の受講が可能でございますので、ぜひ必由館高校及び千原台高校も来ていただければと思います。 今年度は、高校生は熊本学園大学付属高校の生徒さんや尚絅高校の生徒さんがそれぞれ日商簿記の講座や画像処理の講座を受講していただいている状況です。 また、入試も市立高校推薦ということで、市立高校からは非常に有利なかたちで当校に入れるようにした優遇措置もございます。
城野実 必由館高等学校 校長	留学に関してなんですけど、実際の留学のことで今現在進んでいるのは、もともと短期留学をオーストラリア研修としていたんですけど、学校だけでは厳しかったので、業者と話し合いで福岡出発の九州全体で人数をそろえてするというかたちを今取っています。夏休み、今度また冬休みの募集をするんですけど、外部を使ったものはそういうかたちでやろうと思っています。 あと、サンアントニオは今交渉中なんですけど、もともとが熊本市と向こうの大学との契約だったので、できればサンアントニオ市との契約にならないかと考えております。現状の大学の附属の高校と1対1でやっているような状況で、それについてもコロナがこうやって収まっていく中で今交渉しているところで、まだ結論が出ていないような状況ですけど、うちとしては研修をぜひ続けていきたいということです。
西山忠男 委員	ぜひ進めていただきたいと思いますけど、今は円安でものすごくお金がかかるようになってるんですよね。だから、我々も気楽に海外の国際会議に出たいと思ってもなかなか行けないような状況ですので、その辺はやっぱり何か市として援助をお願いできないかなというのが率直な気持ちでございます。

遠藤洋路 教育長	そこは日銀に言っていたかないと（笑） でも、そこは、高校生が国際的な経験ができるように、それは市としても頑張っていけないといけないと思います。
苫野一徳 委員	私も、先ほど教育長もおっしゃいましたが、市立高等学校との改革検討委員会のときから一緒させていただいていたので、本当に何か感慨深いなと思って、いや、すごいな、こんなところまで生徒たち頑張ったんだなというのを、もちろん先生方もなんですけど、本当にさっきに引き続き感動しております。 それで、もう本当にすみません。私も今知ったというか、ツイッターフォローいたしました。もう大いに私もリツイートしまくっていいと思いました。その関係でいうと、生徒たちがもっと学校PRに参加できますよね。それだけじゃなくてインスタとか、T i k T o kとかもいいのかどうか分かりませんが、そういったもので、多分生徒のほうが圧倒的にPR能力は高いと思うので、どんどん生徒たちが、それこそプロジェクトチームでうちの高校こんなにいいぜというのをぜひやってもらえたらいいなと私としては感じました。 それと、必由学について質問も含めてなんですけど、これは基本的にプラスアルファということになるんですかね、時間的には。ここに書かれてあるように。
城野実 必由館高等学校 校長	実は他の教科を1時間減らして、そこで1時間必由学をやるというものです。ただ、これが昨年度から準備しているのもまだ1年目の必由学基礎しか、中身が35時間分しかまだ出来上がっていないので、来年度動きながらと今年度の後期で2年生の必由学基礎と3年生の必由学応用について、具体的な35時間のカリキュラムを今からつくっていくという感じになります。
苫野一徳 委員	じゃ、そんなに生徒の負担が時間的に増えるというわけでもないんですね。
城野実 必由館高等学校 校長	週32時間のままで、私として30時間まで減らしたかったんですけど、先生たちが今までのリズムでいきたいということで、週32時間の授業はそのままの中でやりくりしているような状況です。

苦野一徳 委員	総合的な探究は、それはそれとして並走しているという感じですね。
城野実 必由館高等学校 校長	はい。
苦野一徳 委員	まず、その必由学の具体的な、もう既にカリキュラムをつくられているということなんですが、私がまだ具体的にちゃんと把握できていないので、とんちんかなことを申し上げるかもしれないんですが、『『スキル』を身に付ける教科を創ろう』とここで書かれてあります。あくまでも一般論ですけど、スキルだけを取り出して学んでもあんまり意味がないというのは教育学の研究でよく分かっていることで、プレゼン力だけを鍛えるとか、そういったことをやるんじゃなくて、やっぱりあくまでも本物の学びの中でプレゼン力が鍛えられていると、これはとても大事だと思うんです。一緒に並走している総合的な探究と密接に関係をしながら、そちらをむしろメインにしながら、必要に応じてというように必要なスキルであったりとかを必由学が支えていくという。もちろんこれが目玉でいいと思うんですけど、これだけを、スキルだけを取り出してというような発想にはならないほうがいいんじゃないかなというのは感じたので、どんな感じになっているかというのをもう少し教えてください。
城野実 必由館高等学校 校長	本当言われるとおり、必由学というのは週1時間やっていく中で、他の教科の授業だったり総合的な探究の時間で使えるような基礎をそこでやっていくと。実際には、教科の授業の中でプレゼンテーションを多く使う授業を入れていって、実際そこでは1時間のプレゼンテーションの授業しかないけど、あとは教科の、例えば保健の授業でプレゼンテーションを使うとか、総合的な探究の時間で使うとか。データサイエンスの表を見るほうだったら、これを情報の時間で使うとか、数学の時間に読み取りをさせるとかということで、基礎的な必由学をそれぞれの教科と探究の時間でしっかり実用できるようにやっていくというかたちで考えています。

苫野一徳 委員	ありがとうございます。
遠藤洋路 教育長	よろしかったですかね。
	じゃ、小屋松委員どうぞ。
小屋松徹彦 委員	
	この必由学というネーミングが非常に何かインパクトがあっ
	ていいなと思っているんですね。
	それで、今のスライドでいくと、最初の5ページぐらいがこ
	の必由学について説明がありましたけど、やっぱりこれだけ見
	ても何かもう一つぴんと来ないところがあるので、これからで
	しょうけど、必由学とはということで何か平易な言葉で打ち出
	すような、何かそういったインパクトのある必由学の定義を作
	られるといいかなというふうに思いますので、今後ぜひ検討し
	てもらえたらと思います。
遠藤洋路 教育長	
	検討はぜひよろしくお願いします。
	こうやって名前をつけるというのはとてもいいと思います
	よ、非常に。今、小屋松委員もおっしゃったようにインパクト
	があるし、正直私たち、中身がよく分かっていないのに名前は
	すごい認識しているということで、その時点で成功だというふ
	うに思いますので。それを分かりやすく説明できるようなもの
	があれば、なおすばらしいんじゃないかなと思いますね。
	何か上野審議員がしゃべりたそうにしていますけど。
上野正直 教育改革推進	
課教育審議員	
	まさしく私、3校の、ビジネスと千原台高校と必由館高等学
	校のカリキュラムマネジメントについてのコーディネーターを
	2年間やらせていただいて、一番大きかったのは先生たちとと
	もに生徒たちがこの学びについて変容していった。その中で、
	生徒たちも先生たちも横文字で言うとCo-agency、一緒に共同体
	で新しい学びをどんどん進めていったということが成果かな
	と思っています。
	もう一つ、これから必要な学びについて共に共有することが
	できていて、これからどう自分たちの授業をつくっていくのか
	ということに生徒たちがいろいろと意見を言い始めている。こ
	れが一番大きな成果かなと思っています。まさしく先ほど出ま
	した、総合的な探究の時間がやはりハブ、いわゆる結節点、中
	心軸となりながら、普通科の科目も含む教育全体で教科横断的
	に取り組むところに注目をしていただいて、学校でつくってい

遠藤洋路 教育長	っていただきましたので、これからは、さらにそういう今の時代に非常にこれから資するような生徒たちがどんどん活躍をして、その中で育っていくような学校になっていくのじゃないかなと思って楽しみにしています。長くなりました。 急に振ってすみません。ありがとうございました。 あと、まだご発言されていないのは、澤委員はいかがですか。
澤栄美 委員	私は必由館と千原台の学校改革は去年からの就任なので、経過がもう大分経ってからなんですけど、ビジネス専門学校も含めて、生徒や学生がこの改革に関わっているというところにすごくやっぱり価値があるかなというふうに思いました。 どの学校を見ても、特にビジネス専門学校はそのまま社会に出ていくということで、みんなキャリアを今後どうしていくかというところに視点が置いてあるところが、どの大学に行くかとか、どんないい生活をしていくとかじゃなくて、生き方として教育を見詰め直しているというところがすばらしいなというふうに思ったんですね。 今、改革が始まったスタート地点なので、今後、子どもたちがこの学校に行きたいなと思うときに、ここで学んだ生徒や学生がどんなふうに未来像を実際に描いて歩んだかというところの広報が、今後は必要になってくるかなというふうに思いました。 私、視察のときじゃなくて、たまたまビジネス専門学校に情報教育研究会の研修でちょっとお邪魔させていただいて、学生が作った学校紹介みたいなものを見たんですけど、この学校を選びたいとかどうしようかなと思っている子どもたちには、やっぱり実際にいる生徒や学生の声というのが一番印象に残って、これはピアサポートというところの視点からとも言えると思うので、やはり今後も、学校に実際にいる生徒や学生が発信していくということに期待をしたいと思います。
遠藤洋路 教育長	では、村田委員は完全初めてご覧になるんだと思いますけど、ご感想でも構いませんけどいかがでしょう。
村田槇 委員	私は、家でテレビのニュースを見ていたときに、ちょうど教育長に必由館の生徒が食ってかかっているのを見て、高校生はパワフルだなと思ったことがあるんです。自分は今子育てして

遠藤洋路 教育長

いる保護者で、これから中学、高校と上がっていく子どもが家にいますけど、やっぱり実際に今そこで、学校で生き生きと何か活動したり、何が楽しいとかどんな授業とか、そういうのをその生徒さんにどんどん発信をしていただいて、そういうのを見て自分たちで興味を持ってここへ行ってみたいとか、そういう選択肢にどんどん広がってくれるといいなというふうに思っています。

やっぱりそれぞれの学校、3校とも学校ができたときの状況とかニーズと全く今変わってきてしまっていて、そもそも市立の学校が要るのかというそこから議論が、ゼロから始まったわけですね。それで今ここまで新しい時代に対応したというか、新しい時代をつくっていきけるような学校に、本当子どもたちも含めてみんなでつくり上げてきたという、非常に感慨深いなと思います。

ぜひ来年度以降、千原台はもう先に倍率も高くなって、1年先にやっているだけのことはあるなと思いますけど、必由館もぜひ負けないように頑張りたいと思います。

本当に非常にどの学校も、多分この委員の皆さんも聞かれてとても安心というか納得というか、そういう取組ができているんじゃないのかなというふうに思いましたので、ぜひその調子でどんどんやっていっていただければなと思いますので、よろしくお願いします。

他にはよろしいですか。

ご発言がなければ、本件は以上といたします。

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

本日の会議日程は全て終了いたしました。これで、令和5年9月定例教育委員会会議を閉会いたします。